

伝統的建造物群保存地区における再生・更新に向けた 計画要件に関する考察

— 山口県柳井市古市・金屋地区を対象として —

日大生産工 (院) ○福屋 亮平 日大生産工 古田 莉香子
日大生産工 広田 直行

1. はじめに

1-1. 背景と目的

日本には現在、43 道府県 104 市町村 126 地区もの伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）があり、規模や種別に違いがあるが、どれも我が国にとって歴史的価値の高いものとなっている。一方で、観光地化されていない地域は、過疎地域と同じように後継者不足や世帯数・人口の減少、空き家対策、転出者の増加が進行しているのが現状である。そのため、こうした地域では遺された景観を守りながら、その町の環境を魅力的に活用していく、持続可能なまちづくりが重要になってくる。

街並みとは更新されていくものであり、既存のガイドラインでは修理や修景に重きを置き、過去のみに関わられたガイドラインとなっている。本来、伝統的建造物や居住様式は住民やその集合のコミュニティと共存しながら現代の変容に即して利用され、かつ次世代へと継承されるべきものである。

本研究では、計画の核となる伝建地区の遺構を整理し、整備実態から課題を分析する。その後、多世代に渡り住み続けることができる持続可能なまちづくりに向けた機能を選定し空間形態に示すことで特徴を明らかにする。歴史的町並みを活かした再生・更新に向けた計画の一助とすることを目的とする。

1-2. 研究の方法・対象

対象地区は、伝建地区に選定されている山口県柳井市古市・金屋地区とする。昭和 59 年に国の伝建地区に選定された、古市・金屋地区は「白壁の町」として復元保存が図られている。しかし、同地区においても、世帯数・人口の減少や空き家の増加といった課題が顕在化しつつある。

本稿では、文献・資料から今後のまちづくり

において核となる伝建地区の遺構を整理し、実地調査では、伝建地区の整備実態から課題を分析する。その後、多世代に渡り住み続けることができるまちづくりに向けた機能を選定し、空間形態に示すことで、空間の特徴を把握する。

2. 白壁の町の歴史と遺構

2-1. 白壁の町並みの町割りと伝統家屋

白壁の町中心部の古市・金屋は一丈(10 尺)単位で町割りがなされている。町屋敷は、南北幅がおおよそ 150m で、地表面は、北側と南側で比高差がおおよそ 2~3m あり、北側の高所から南側の海へ、雨水や生活用水を傾斜に合わせて流すために、室町時代にこのような地割りとなり、その地割りは現在も続いている。

この白壁の町並みは、おおよそ 200m の本町通りの両側に短冊状に屋敷が並んでおり、間口が狭く、奥行きが深い、「うなぎの寝床」と呼ばれる江戸時代の商家の造りである。古市金屋地区の主な都市機能は、歴史を通して商業にあつたため、街路に面して間口を開く町家の並びを基本的な形としている。土蔵造りの主屋があり、中庭を挟んで付属建物(土蔵、離れ、座敷、門、板塀)が細長く配列され、そのような宅地が密集し町が構成されている。



図1 伝建地区の周辺環境

Study on Planning Requirements for Rehabilitation and Renewal in Traditional Building Preservation Districts Considerations for Planning Requirements
—The project is aimed at the Furuichi and Kanaya areas of Yanai City, Yamaguchi Prefecture—

Ryohei FUKUYA, Rikako FURUTA and Naoyuki HIROTA

2-2. 計画の核となる歴史的遺構

A 柳井川

かつて港湾都市として発達し、その後商業都市として栄えた古市金屋地区において、柳井川は、切り離すことができない重要な歴史的要素である。

海岸を埋め立て、敷地を背後に拡張したことにより、古市金屋地区では、南側が特に奥行き深い地割りとなり、柳井川が生まれた。柳井川は、小路を通して本町通りと繋がり、荷揚げした品を商家に送っていた。柳井川の石垣には、川を遡ってきた舳から荷物の積み下ろしを行っていた雁木(石段)があり、当時の船着き場の名残が残っている。



写真1 柳井川



写真2 柳井川の雁木

B 石積み水路

古市・金屋地区にある建造物のうち52棟が伝統的建造物に指定される中、それらと一体をなして歴史的景観を構成する物件として、石積み水路33件が特定物件に指定されている。

短冊型によって区切られた伝統家屋の隙間に設けられた雨落ちのための石積み水路は、北側から南側へ向かって流れ、東西に走る街路を暗渠水路で渡り、柳井川と繋がっている。

かつての水路がそのままの姿で現存するのは、全国でも稀であり、家屋を緩やかに仕切り境界となる水路は、白壁の町の個性であるといえる。石積み水路は、保存の措置が取られておらず、整備すべき物件にあげられる。

東西を通り抜ける本町通りは、人々の往来で賑わう商業の軸であり、また通りに対して短冊型に家屋が連なるため、北南を生活の軸として捉える事ができる。解体により地区内の空洞化が進む中、生活の軸に沿った水路が商家の宅地割りを示す遺構となっており、伝建地区の軸線を構成している。



写真3 小路脇の水路



写真4 境界となる水路

3. 伝建地区の現状と課題

3-1 白壁の町の整備実態

昭和59年、伝建地区に選定されて以来、主として、本町通りや柳井川に面した部分を中心に修理、修景が進められ伝建地区としては、小規模ながら密度の高い空間が創出されている。保存物件の中心をなす商家主屋は、本町通りの南側において特に保存状況がよく、隙間なく建物が街路に対して整然と建ち並ぶ。

古市・金屋地区にある建造物のうち52棟が伝統的建造物に指定され、主屋41棟、倉庫(蔵)8棟、工場2棟、物置1棟である。特定された伝統的建造物は、東西に延びる本町通りから柳井川に至るかけや小路に面する建造物、工作物に限られており、その奥に残存する土蔵、庭、奥屋敷等は、詳細な資料がなく、保存の措置がなされなかったため、伝建地区選定後に姿を消したものもある。

3-2 未特定建造物の現状

現在の伝建地区は、表通り中心のまちづくりが進められ、主屋を主とする線的な保存がなされている。伝建指定された建造物は、積極的に利活用が行われ、空き家となった伝統家屋は、店舗として町に開かれている。

一方で、伝建地区内には、多くの未特定建造物があり、密度の高い景観が創られている。主屋裏側の整備されていない密集した空き家・空き倉庫は、防火や改修のしにくさから、解体の対象となり、敷地の空洞化が進行している。(図2)

地区内の伝統的建造物以外の建物も町並みを構成してきた大事な要素の一部であり、そうした建物も含めて町は醸成してきた。敷地内部の建物は、屋根・外壁破損などはあるものの修理によって十分耐用が可能であるものが多い。そのため、空き家・空き倉庫を解体するのではなく、未来へと持続させるまちづくりが求められる。

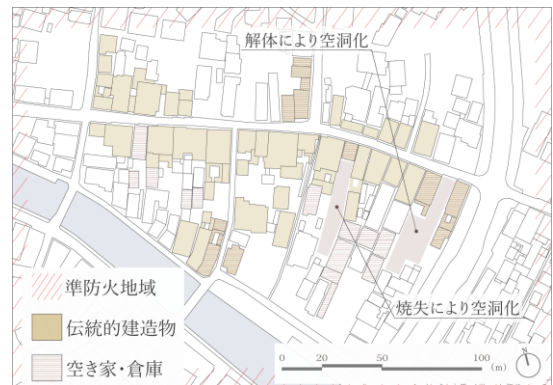


図2 空き家・倉庫の分布

3-3 伝統家屋の継承

伝建指定建造物の所有者には、高齢者が多く、高齢化に伴う商業離れ・みせの縮小などから使われていた倉庫が空き空間となっている。また、伝建指定建造物を所有する28世帯のうち、次の相続予定者の居住地を山口県内、柳井市内、県外に分類した。結果を図3に示す。

図3から県外が最も多く13世帯が居住していることがわかる。また、山口県内に居住している世代は12世帯であり、その内、柳井市内に居住している世帯は2世帯である。

このことより、伝建地区周辺に居住している相続者は少なく、相続しても伝建地区で生活することは難しいと考えられる。そして、近い将来、地区内で生活を行う世帯数は減少し、また、管理の行き届かない奥行きのある町屋建築は、失われる可能性がある。

そのため、今後は、所有者の理解を得ながら、個人の生活の場として使われていた建物の所有体制に行政や企業が介入する余地を与えることで、町の生活の場として開くといった新たな継承の形を模索する必要がある。また、使われなくなった余剰空間から少しずつ開くことで、段階的な継承も可能となる。

4. 伝建地区の機能と空間形態

4-1 伝建地区の商業と周辺環境

古市金屋地区のある駅北地区は、自家用車の普及につれ、駐車場の不整備などにより、商業活動が停滞するようになった。結果、このことが町並みを残存する1つの要因となったが、伝建地区の商業は賑わいを失ったままである。

現在、伝建地区には、資料館、伝統品の体験場、お土産屋といった観光に特化した店舗が多く、カフェや食堂といった地域生活者向けの店舗が少ない。そのため、日常的な利用は見られず、地域住民が白壁の町を訪れる機会が減っている。

一方で、古市金屋地区の周辺には、幼稚園、学校、市民体育館、音楽ホール、図書館といった施設が地区を囲むように点在しており、文化と教育が入り混じる文教地域である。白壁の町の本

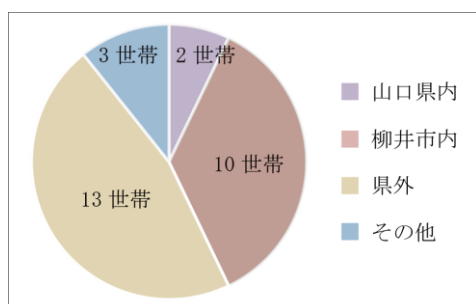


図3 相続者の居住地

町通りは、周辺の小中学校の通学路であり、学生にとって伝建地区は身近な存在である。

4-2 機能の選定と空間の特徴

思いや営みを継承するため、地域住民の方々に白壁の町での思い出についてヒアリングを行った。ヒアリングの結果、かつては、食料、雑貨屋、食堂、理髪店をはじめとする地域生活者向けの店舗があり、伝建地区内で生活が完結していた。また、付近の子供たちは、抜け道や空き地で遊ぶなど日常的な賑わいがあった。

周辺環境や過去の事象、町のイベントに着目し、伝建地区に求められる需要を整理することで、機能の選定を行う。

まず、交流機能として、交流スペース、まちライブラリー、工房、セカンドスクール、畑、こども食堂を選定する。次に、働く場や滞在の場においては、貸しテナント、コワーキングスペース、宿泊場をあげ、また、町のイベントをサポートする場として、ねぶた鑑賞倉庫、広場を選定する。

多世代に渡り住み続けることができるまちづくりにおいて、コミュニティを促す空間構成は重要である。そこで、伝建地区のコミュニティの主となるハレの場と自他との距離の視点から選定した機能を分析する。

ねぶた鑑賞倉庫や交流スペース、広場では、ハレの場での利用が想定されるため、表通りや屋外と連携できる空間構成や配置にする必要がある。また、交流スペース、こども食堂、コワーキングスペースは、屋内機能ではあるが自他との距離が近く交流を促す空間となるため、利用に応じて表通りや屋外と繋がれる空間構成が望ましい。一方、まちライブラリーや宿泊場といった、自他との物理的距離が遠い機能では、伝建地区の奥に配置するなど一人利用に配慮した計画が必要となる。

機能を屋外、半屋外、屋内3つの空間形態として示し、ハレとケの空間と自他との距離の二軸を用いて図5に示す。

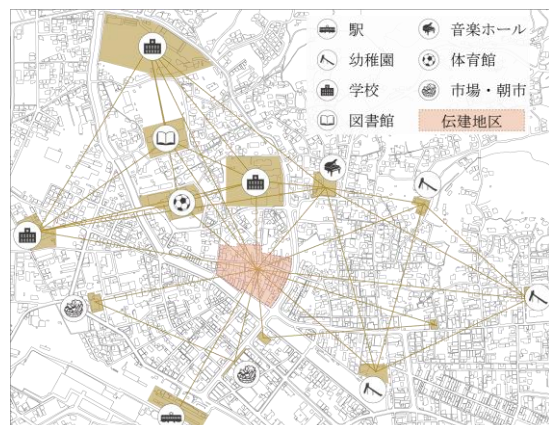


図4 伝建地区の周辺環境

5. まとめ

本研究では、山口県柳井市古市・金屋地区を対象地区とし文献・資料の分析から、今後のまちづくりにおいて核となる伝建地区の遺構を整理し、実地調査から伝建地区の整備と現状を明らかにし、今後の継承の形や伝建地区内のプログラムの考察を行った。

室町時代から続く地割りが残り、地割りに沿って配置された主屋、中庭、付属建物は、小規模ながら密度の高い空間が創出されている。また、かつての姿で現存する石積み水路は、白壁の町の特徴であり、まちづくりにおいて核となり得る遺構だと考える。

一方で、伝建地区の側道や主屋裏側の整備されていない未特定建造物は、防火や改修のしにくさから、解体され敷地の空洞化が進行している。柳井市古市金屋伝統的建造物群保存地区保存計画では保存の方向を、「保存地区の特性を活かしながら、伝統的建造物群及びこれと一体をなす環境を保存し、加えて住民の生活環境の向上を配慮しつつ、保存地区の修理、修景、復旧、管理に努めるもの」としている⁸⁾。敷地の奥にある建物の保存、修景は住民の生活環境の向上に役立つとともに、より密度の高い歴史空間の創出につながると考える。そのため、本町通りに沿った主屋を中心とする線的な保存から、主屋、中庭、土蔵、離れという一連の町屋建築の保存を行うことで、面的な保存へと充実させる必要がある。

実地調査の結果から、近い将来、地区内で生活を行う世帯数は減少し、また、管理の行き届かない奥行きのある町屋建築は、失われる可能性がある。とわかる。

今後は、所有者の理解を得ながら、個人の所有体制に行政や企業が介入するといった新たな継承の形を模索する必要がある。また、周辺環境や過去の事象、町のイベントを考慮したプログラムは、周辺施設と連携することで、町の中心であった伝建地区を起点として、多世代交流を促し、持続可能な町づくりへと繋げることができると考える。

今後は、得られた空間の特徴から1人でも来ても誰かと繋がり交流を深める場となる機能の配置計画を行い、白壁の町を構成する要素や空間性を明らかにすることで、歴史的町並みを活かした持続可能な町づくりの実現方法の提案を行う。

参考文献

- 1) 鈴木充 三浦正幸 「柳井の都市構造と都市景観の研究1 都市構造の変遷」日本建築学会中国支部研究報告集 第9巻2号 1982年3月
- 2) 鈴木充 小野寿幸 「柳井の都市構造と都市景観の研究 2 地域と街路の景観」日本建築学会中国支部研究報告集 第9巻2号 1982年3月
- 3) 生田光晴 藤原敏記 「近世柳井津町の拡大による町割りの形成に関する一考察」日本建築学会九州支部研究報告 第42号 2003年3月
- 4) 柳井市史編纂委員会 編「柳井市史(総論編)」柳井市(1988) pp.458-463.
- 5) 財団法人 文化財建造物保存技術協会 編 「需要文化財 国森家住宅修理工事報告書」重要文化財 国森家住宅修理委員会 (1984)
- 6) 柳井市古市金屋伝統的建造物保存地区 一柳井市古市金屋伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書— 柳井市教育委員会 (2000)

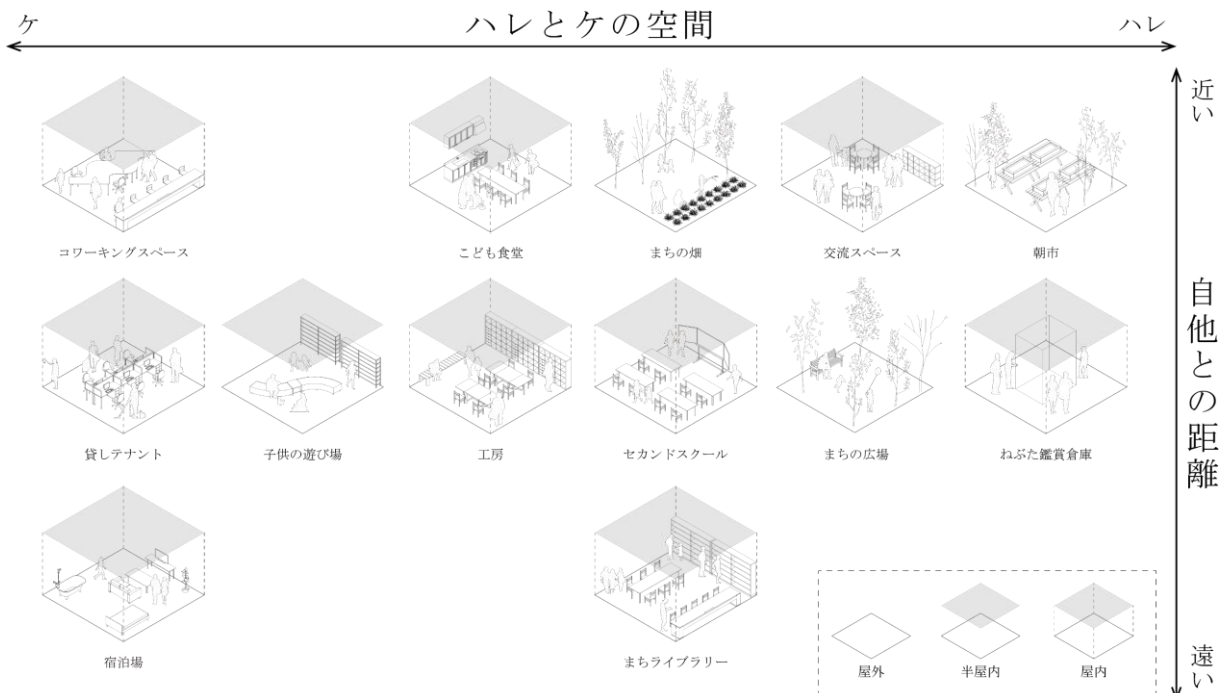


図5 機能の空間形態